

第7回北勢線の魅力を探る

～古代から現代を歩く～

開催日 2006年9月18日(月・祝)

参加者 115名(内子ども4名)

協力 額田自治会、照林寺、田中木工所

額田廃寺跡～額田神社～白山神社～蓮花寺

星川駅へ集合し有吉台団地奥の公園へ到着。「額田廃寺跡」と記された石碑の前で遺跡の概要をスタッフの伊藤通敏さんが説明した。ここには浄蓮寺というお寺があったが、織



額田廃寺跡

田信長の北勢侵攻で焼かれたらしい。江戸時代後期に銅製と瓦の仏像(専仏)が拾われ、古瓦も出土することから昭和16年(1941)に、県史跡に指定された。ところが昭和38年開発計画があり、工事に先立って発掘調査が行われた。南面に門を持ち築地塀に囲まれた法隆寺式の伽藍配置の白鳳期の古代寺院だということがわかった。出土品の中に天武天皇が深く帰依した飛鳥の川原寺のものと全く同じ型から作られた彫りの深い複弁蓮華文の軒丸瓦があり、この額田のあたりを治めていた

豪族が壬申の乱の後に天武天皇から授かった褒賞瓦かもという説もある。調査の後この山はブルドーザーで切り開かれ、今は公園の片隅に石碑が申し訳のように建つのみである。

額田神社は古代にこの地方を開発した額田部氏の祖神「意富伊我都命を祀る神社で、延喜式内社である。額田部氏は大和の額田郷から移住してきた一族である。付近には小さな古墳がいくつかあったとの伝承もある。また額田神社は南方約800mほど離れた増田の田んぼの中にもある。これは、江戸時代後期に増田地区の開発が進み、増田の氏子が参詣に不便であるため分祀したといわれる。

白山神社の祭神は菊理姫命。幾つかの境内社もある。この辺りには蓮花寺西城、東側には蓮花寺東城があり、ともに信長の北勢侵攻によって滅ぼされた。住宅団地開発で跡形はすっかり消え失せた。

鎌倉時代、この地に相当繁栄した巨刹蓮花寺という大寺があったので村名となったという。鎌倉の無住道暁(無住国師)という禅師が晩年にこの寺に住み、没したという。住宅開発によって遺跡のなごりは今は何もない。東側の神田池は灌漑用として大切にされている。南側の堤に植えられている桜と、かつての蓮花寺



額田神社

川沿いの桜並木とともに、桜の名勝「蓮花寺の千本桜」と呼ばれて、たいそう賑わった。

照林寺～西別所～玉三稲荷

照林寺に着いた。スタッフの高橋省吾さんが説明した。ここは、昔は西別所の会所であったが、明治44(1911)年に桑名城下の萱町法盛寺の塔頭の照林寺が移転してきた。さらに濃州道を東に進むと小さな地藏堂がある。石橋供養塔と台座に刻まれており、安永6年(1777)に濃州道の道中安全を祈るために建立されたそうである。やがて西別所の落ち



赤レンガの煙突（現在は無い）

着いたお屋敷の家並みがある。大正時代から昭和の初期に水谷一族の家々と辻内家が建てられたとのこと。

濃州道をさらに東に進むと上野に入る。沿道には古いたたずまいの建物もある。西村製油場（上野2番地）は天然素材の伝統的な油を造っており、隣の小塚さん（上野1番地）は外観は普通の家だが、近年まで産婦人科の医院であった。小塚家は大正ころの建築、西村家は昭和初期の建築である。

栄町の玉三稲荷へ行く。安藤家がお祀りしている。ここは江戸時代以前は町屋川の川原であったと言われる。西川原・栄町から馬道へと続く濃州道は町屋川の川堤が道路となったので、微妙にカーブしており、歩き易い道である。

馬道～走井山

馬道は桑名城下町から員弁方面への出入り口にあたり、馬の往来が多いので地名になった。今でも商店が見られる。中でも古くて大きな建物が田中木工所である。総2階の土蔵造りで、嘉永7年(1854)の建築である。元は油絞りを業としていたが、現在は伝統的な日本家具を製造している。

走井山勸学寺一帯は走井山公園として整備されている。戦国時代には矢田城があったが、永禄の末頃(1567～1570)に織田信長の北勢侵攻に際して落城した。本尊は千手観音で昭和30年(1955)4月に三重県指定文化財となった。この像は毎年8月9・10日の十日観音で開帳されている。本堂は元禄期(1688～1704)の再建で、桑名市内では古い寺社建築の一つである。天井絵や多くの絵馬が有名。



田中木工所（現在は無い）